

探索遊びによるセルフモニタリングの育ち  
ハンガリーの保育動画をもとに

Development of Self-Monitoring Functions Through Exploratory Play.  
Based on Video Materials from a Nursery School in Hungary.

迫 共

要 約

本研究は、2016年の全国私立保育園連盟のハンガリー研修で見学されたキケレト幼児保育園の探索遊びをもとにした事例検討である。マイバ保育園副園長のチェンゲーディが述べるように、外界の環境刺激に対して複数の感覚モダリティを活用する遊びによって子どもの知覚は構築されて行き、それは人間関係の把握と理解にもつながっていく。キケレト幼児保育園の探索遊びでは、探索児と他児たちがセルフモニタリングを行いながら活動が実施され、それによって探索遊びが成立していることが分かった。

乳幼児の音楽遊びや運動遊びに伴うセルフモニタリングは、保育場面において様々に活用されているが、今後の検討と応用が期待される。

キーワード：ハンガリー、環境、探索遊び、感覚モダリティ、セルフモニタリング

1. ハンガリーの環境保育

筆者は、2016年11月、全国私立保育園連盟のハンガリー研修に参加し、乳児保育園、幼児保育園、保育士養成校などを見学した。わが国の保育界における、ハンガリー保育の受容プロセスや、ハンガリー保育の特徴のひとつである「流れる日課」については迫(2019)において検討した<sup>1)</sup>。本研究はハンガリーの保育園で観察された音楽を活用した探索遊びの動画の分析をもとに、その魅力やわが国の保育への応用の可能性について検討するものである。

ハンガリーのブダペスト市にあるマイバ保育園の副園長、チェンゲーディ(2017)によると、ハンガリーの幼児教育において重視されていることは、子どもが環境を知ることを通して、多種の経験を得ることである。

「子どもにとって大切なのは、多くの感覚器官を用いた経験(触れる、見る、においを嗅ぐ、味をみる、聞く)であり、そこから知覚が

『構築』され、その全てが、年齢に相応しい、相互の関係の把握と理解に欠かすことができないものとなります」と彼女は述べている<sup>2)</sup>。

乳幼児期の子どもの認知や心理的な成長において、環境からの刺激は必要不可欠なものである。それらは五感を通して子どもに様々な刺激をもたらす。誕生間もない子どもは刺激を受け取り、原初的な反応を表出するばかりだが、やがて自ら環境に働きかけ、様々な相互作用を起こしていく。

この相互作用は新たな刺激を生み出し、子どもの成長を促す。保育者は注意深く子どもたちの環境を調整し、子どもの感覚器官を十分に刺激しうるように準備しなければならない。室内に遊びのコーナーを整備する際にも、様々な感覚に働きかけられるようにという視点を失ってはならない。

また環境との相互作用は、乳児の知覚の構築だけでなく、幼児期においては社会性の発達にも影響していくものである。

## 2. 先行研究

本節では、わが国におけるハンガリーの保育に関する先行研究について概観する。

1968年、音楽教育家の羽仁協子がコダーイ芸術教育研究所を設立した。羽仁は同年、フォライ・カタリンの『ハンガリー子どもの遊びと音楽』を訳出し、ハンガリーの保育理論、音楽教育、絵本に関する翻訳、著述を行った。

近年では、羽仁の共訳者であったサライ美奈と町田千秋がくるみの木教育研究所を設立し、ハンガリーの保育について紹介する季刊誌「くるみの木のおたより」（2011～）を刊行している。

サライと全国私立保育園連盟保育国際交流運営委員会（2014）は、全国私立保育園連盟によって例年実施されてきたハンガリー研修の要点に、「わらべうた」「流れる日課」「異年齢保育」「コーナー保育」などに関する実践例や質疑応答等を多数加えてまとめたものである。

渡邊（2012）は、短期大学1年生のハンガリー保育研修の報告である。見学先は筆者と共通する場所が多く、具体的な保育内容についても報告がなされている。

大槻（2017）は、2007年に現地の幼児保育園保育士宅にホームステイし、保育体験を行った記録をもとに検討しており、ハンガリーにおける一般的な保育の内容が紹介されている。

このように保育や音楽の実践家を中心として、ハンガリーの保育に関する受容は一定の蓄積が見られる。その一方、ハンガリーの保育実践について、詳細な記述が充分に行われているとは言い切れない。そこで本研究では、検討の対象をひとつの探索遊びに絞って、環境からの刺激が子どもの発達にどのように影響していくのかを、細かく検討することとした。

## 3. 環境による感覚・知覚の成長

子どもは、遊びの中で外界の人的・物的環境との相互作用を行う。その際の五感による知覚の刺激は、感覚器官の発達を助長する。また遊びの継続的な活動の中で、認識機能の発達が促されていく。感覚・知覚の成長により、子どもは自分の身体機能に根差す基礎的な感覚を獲得する。感覚刺激によって世界像の獲得が生まれ、子どもは世界の様々な現れを認識するようになる。同時に様々な感覚器官の刺激は自己認識を生起させる。子どもは遊びの中で自分自身の様々な側面を知ることになっていく。

つまり、子どもは外界の事物の大きさや重さ、位置や距離を知るとともに、自分自身の身体の高さや四肢を動かせる範囲などを知る。そのためには視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などにまたがる複数の感覚モダリティを同時に活用し、認識を統合していく機会が必要となる。たとえば外界の視覚的刺激と聴覚的刺激が同時に働くことによって、精緻な環境認識が可能になるはずである。

わが国の保育内容領域で考えると、乳幼児の感覚遊びは5領域における「環境」の基盤の上に、「健康」や「表現」、「言葉」、「人間関係」のすべての領域へと広がっていくものである。子どもの遊びも学びも、様々な環境を通して、実現されるものである。

ハンガリーの保育においても環境からの刺激は遊びの重要な契機となっている。チェンゲーディは感覚遊びの例として、目かくしをして、箱の中の物が何かを当てる遊びを提案している。視覚を遮ることで、視覚以外の感覚器官が発達し、視覚に紐づいた記憶と他の感覚モダリティからの情報が総合される。それによって視覚と触感による環境の把握がより精緻になるのである。子どもの中で、ひとつの感覚モダリティへの刺激と、他の感覚モダリティへの刺激とが関連づける経験が蓄積されると、複数の感覚を同時に活用し、環境からの刺激をさらに、幅広く受け取ること

ができるようになっていく。

子どもは遊びを通して、物的環境だけでなく人的環境とも関わり、相互作用を深めていく。保育者、同年齢や異年齢の子どもと関わることにより、自己理解と他者理解、自尊心と社会性などを育てていく。

#### 4. ハンガリーの保育園における探索遊び

筆者は 2016 年にハンガリーでの保育研修に参加した。本節ではその際に撮影した幼児保育園での音楽を活用した探索遊びの動画資料をもとに、複数の感覚モダリティを使用した探索遊びによって何が育つのかを検討する。

動画を撮影したのは、ブダペスト市郊外のグドゥルーにあるキケレト幼児保育園である。キケレト幼児保育園は民族伝承プログラム協会のマスター園であり、ハンガリー中の園にプログラムを伝える役割をもつ保育園である。研修時の筆者のメモによると、訪問時の園児数は 110 名であり、異年齢の 4 クラスで運営されている。職員配置は 1 クラスに保育者が 2 名ずつ配置されており、教育アシスタントが 1 名、そして園長がいる。筆者ら研修団は、日本の園での設定保育にあたる「課業」の時間を見学することができた。

保育室内で 30 名弱の異年齢の園児に、1 名の保育者が素歌でわらべうたを歌いかけ、全員で歌いながら身ぶり手ぶりを交えてつながり、蛇のように動きながら楕円を描くわらべうた遊びが行われた。そのあと、輪になって座り、保育者の身振りに合わせて素歌を大きな声・小さな声で交互に歌う遊びになった。さらに、歌でおもちゃを探す遊びが始まった。以下、この探索遊びに注目して検討を行う。

探索遊びの手順は以下のようなものである。保育者がひとつのおもちゃを探索遊びの目標として全員に提示する。おもちゃを探す役の年長児（以下、探索児とする）が 1 名、保育室の外に出る。その間に、他の園児たち（以下、他児たちとする）と保育者が保育室

のどこかにおもちゃを隠す。隠し終わったら、他児たちは保育室の一角に集まって座る。続いて探索児に合図をして、部屋に入ってよいことを知らせる。

探索児がおもちゃを探す間、他児たちは歌を歌う。そして、探索児がおもちゃに近づくほど歌の音量を上げていく。探索児は他児たちの歌の上がり下がりや様子を確認しながらおもちゃを探すことになる。探索児は、おもちゃがどこに隠されているかを知らないので、探索児の動きに合わせて歌の音量は上がり下がりやを繰り返すことになり、やがて目標のおもちゃを探し当てて、探索遊びが終わる（表 1 参照）。

#### 5. 遊びの中でのセルフモニタリングの育ち

遊びの様子を詳細に記述すると、探索児が何を行っているのかだけでなく、他児たちがもつ役割についても検討することができる。

探索児は、他児の歌声の音量の大小を聞き取り、それをもとに自分の立ち位置が目標物に近いのか、遠いのかを考える。このことは聴覚や体感覚を稼働させると同時に、他児の歌声に対して自分自身の身体的な動きが適しているかどうかを測るセルフモニタリング<sup>3)</sup>を行っているということである。

探索児は、自分の身体が向いている状況に対して他児たちがどのように認識し、歌声を変化させているのかを刻々に確認し、そこでどのような行動をとれば最も目的に合うのか（すなわち、歌の音量が大きくなるのか）を、注意深く観察（モニタリング）しながら自身の身体的な動きを調整（セルフモニタリング）して、おもちゃを探すのである。

また他児たちも、探索児の立ち位置や身体的な動きを観察（モニタリング）しながら、歌の音量を調整（セルフモニタリング）している。保育者は他児たちに対して、明示的ではないにせよ歌声の上がり下がりやの指揮を行う。そのため、他児たち（おおむね探索児よ

り低年齢児である)は、保育者や周囲の子の声をたよりに自分の歌の音量調整ができる。

一方、探索児は自分の感覚以外に頼りにできないものがない。他児たちより探索児の課題の方が難しいことから、探索児になれるのはより年長の子どもであることが一般的である。そしてこの遊びの探索児役割を実際にでき、歌声だけをたよりに目標物を見事に発見できる子は、年少の他児たちから尊敬されることになる。

## 6. 考 察

キケルト幼児保育園の歌を活用した探索遊びに見られた特徴として、第一に複数の感覚モダリティの使用があること、第二に探索児と他児たちのモニタリングとセルフモニタリングが効果的に相互作用を起こしていることが挙げられる。つまり探索児の動きに合わせて、他児たちの歌の音量が変わり、探索児はその音量を手掛かりとして探索遊びを遂行するというように、探索児と他児たちは互いに観察とフィードバックを行いながら、歌声と身体的な動きの表現を行うのである。両者のモニタリングとセルフモニタリングの一致が最大になった時、おもちゃが発見され、遊びの楽しさも最高潮を迎える。

他児たちは、探索児の動きを目で追って得られた視覚的刺激を、歌の音量に変換しなければならない。そして周囲の子の歌の音量を聞きながら、自分自身の歌の音量を調整することで、適切な音量の定位を身につける。探索児も他児たちも、複数の感覚モダリティの同時使用を遂行するとともに、感覚の補正の練習を行っていると考えられる。探索児は他児たちの歌の音量を手掛かりにしながら、自分自身の体の向きや一挙手一投足による、その変化に敏感でなければならない<sup>4)</sup>。

加えて、探索児が他児たちの歌を頼りにすることや、他児たちが探索児を応援する気持ちをもって歌うことが予想される。ここから、

社会性の獲得につながっていく実践であることも指摘できる。

わが国の保育内容5領域をもとにこの活動を検討すると、「表現」と「環境」、「健康」に大きく関わる活動であるが、それだけでなく「人間関係」にも関わり、また歌を歌う活動であることから、「言葉」領域の活動とも言い得るものである。異年齢や感覚機能の成熟度合いが異なる子どもを対象にした活動である点も指摘できる。

こうした点から第三の特徴として、一般的な音楽遊びや運動遊びのねらいに留まらない、多様な子どもを対象にできる、総合的で領域横断的な保育活動であると評価することができるだろう。

## 7. まとめ

本研究では、ハンガリーの幼児保育園において観察された音楽を用いた探索遊びを題材として、その特徴を検討し、三点に集約することができた。

第一は、子どもたちが複数の感覚モダリティを使用しており、遊びを通してその訓練が行われていることであった。第二は、探索児と他児たちのモニタリングとセルフモニタリングが、効果的に相互作用を起こしていることがあげられた。子どもたちが複数の感覚モダリティをうまく機能させられるほど、また子どもたちのモニタリングとセルフモニタリングが、効果的に相互作用させられるほど、遊びがうまく進み、楽しみが得られることから、子どもたちは訓練とは意識せず、遊びから効果的に成果を得られているようであった。

また第三の特徴として、多様な子どもを対象とし得る、総合的で領域横断的な保育活動としてこの活動を捉えられることが挙げられた。わが国の保育内容5領域をもとに検討すると「表現」、「環境」、「健康」に大きく関わりつつ、他の領域にも広がる内容を持っていると評価することができた。

乳幼児の音楽遊びや運動遊びに伴うセルフモニタリングの活用は、わが国の保育場面においてもあまり意識されずに様々に実践されていると考えられる。

子どもにとって環境からの刺激は、遊びの重要な契機であるが、環境との相互作用が一人ひとりの子どもの育ちにどのように影響しているのかは、保育の具体的場面では記述しにくいことが多い。本研究で扱ったような複数の感覚モダリティを使用する遊びを観察することは、子どもが環境との相互作用を通して成長する過程を可視化する手がかりとなるかもしれない。魅力的な保育の応用とともに、その記述や分析について引き続き、検討することとしたい。

## 注

- 1) 迫 共 (2019) 「ハンガリー研修を通じた保育原理の検討 『流れる日課』に注目して」『浜松学院大学学習支援センター紀要 第 10 号』、51-59
- 2) チェンゲーディ・マールタ著、NPO 法人コダーイ芸術教育研究所訳 (2017) 『保育園・幼稚園の環境教育』、明治図書、13
- 3) Snyder(1974)によると、セルフモニタリングは「社会的な適切さについての状況的手掛かりをガイドラインとして、自身の表現行動を観察し、統制する傾向性」と説明されている。心理学研究では、主に成人を対象に、他者の目を意識した自己認識について用いられる用語である。本研究は幼児を対象としていることから、未熟で断片的なものではあるが、外界の知覚を通して自分自身が何を感じているのかを知り、それを外界に表現することでどのような効果が得られるのかを再び知覚するという、再帰的な知覚の働きをセルフモニタリングと呼んでいる。セルフモニタリングが十分に働かない幼児は、衝動的な行動をしやすく、動作に際しての力加減ができないなどの

問題を起こしやすい。

- 4) 自分自身の感覚モダリティが捉える刺激についての感受性が未熟であると、外界への表現行動をうまくすることはできない。例えば必要以上に大きな声を出す子どもがいるが、自分自身も大きな声を出すというさはずである。聴覚は音量の大きさを捉えているはずであるが、そのことを適切に感じ取られていない子どもは、本人にも理由が分からないまま疲れたり苛立ったりすることがある。本研究で扱った探索遊びのような複数の感覚モダリティを使用した遊びは、外界の刺激に対する感受性の訓練にもなると考えられる。

## 参考文献

- Snyder, M.(1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 大槻千秋 (2017) 「ハンガリーの保育園と保育事情」『帝京科学大学紀要 13』: 199-209
- くるみの木教育研究所 (2011~) 「くるみの木のおたより」、くるみの木教育研究所
- くるみの木教育研究所 (2014) 『ハンガリー研修旅行資料』、くるみの木教育研究所
- サライ美奈著 (公社) 全国私立保育園連盟保育国際交流運営委員会編 (2014) 『ハンガリー たっぷりあそび就学を見通す保育』、かもがわ出版
- セチェイ・ヘルミナ編著、羽仁協子・サライ美奈訳 (1997) 『0~3 歳児の保育・最初の 3 年間—保母と母親とのよりよいコミュニケーションのために』、明治図書
- フォライ・カタリン著、羽仁協子訳 (1968) 『ハンガリー子どもの遊びと音楽』、明治図書
- 渡邊さらさ (2012) 「ハンガリー保育研修報告：人口 1000 万人から成る国家の保育と教育」『名古屋経営短期大学紀要 53』: 81-90

## 付 記

本稿は日本音楽教育学会第 50 回大会（令和元年）における発表「子どもの表現を導く保育(2) 音楽的活動に着目して」（足立千恵・迫 共）をもとに大幅に加筆、再構成したものである。

## 謝 辞

本研究にご協力下さったキケレト幼児保育園の保育者、園児、保護者の皆様、全国私立保育園連盟国際交流委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。

また、本研究に対してピアノ講師の足立千恵氏、臨床心理士・公認心理師の北聡史氏から助言を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

表 1. キケレト幼児保育園の探索遊び

時間		探索児の様子	保育者・他の園児達の様子
0:00 ～		教室外で待機	目標物 (ぬいぐるみ)を 隠す
0:40 ～		教室内に移動	探索児を 教室内に 呼ぶ
0:54 ～		目標物を探し 始める (テーブル付 近) 目標物までの 距離は遠い	歌を歌い 始める 小さな歌 声
2:35 ～		窓周辺を探す 目標物までの 距離は遠い	小さな歌 声によ り、目標 物まで の距離 が遠い 事を伝 える

<p>2:43 ～</p>		<p>階段前を横切る 目標物までの 距離が近づく</p>	<p>探索児が 階段前を 横切った 瞬間に、 急なクレ ッシェン ドからの 大きな歌 声</p>
<p>2:46 ～</p>		<p>階段下の収納 付近へ移動 目標物までの 距離が遠退く</p>	<p>探索児が 階段前か ら移動し てしまっ ると、急 なディミ ヌエンド からの小 さな歌声 に</p>
<p>2:53 ～</p>		<p>階段前へ移動 目標物までの 距離が近づく 大きな歌声 を手掛かり に、目標物 に近い事 に気がつく</p>	<p>大きな歌 声により 探索児に 距離が近 い事を伝 える</p>
<p>2:54 ～</p>		<p>手すりを持ち ながら階段 下を見ている。 目標物までの 距離がやや離 れる。音量を 手掛かりに階 段下の探索を やめる。</p>	<p>探索児の 様子を伺 いながら 歌声をや や小さく する</p>



<p>2:58 ～</p>		<p>階段を上り始める 歌声を手掛かりに目標物が階段下に無い事に気がつく</p>	<p>再び大きな歌声で歌い、目標物まで近づいている事を伝える</p>
<p>3:05 ～</p>		<p>階段を一段ずつ下り、歌声が小さくなる事を確認する 歌声の方向を見てアイコンタクトを取る 保育者・園児たちの表現を見ている</p>	<p>小さな歌声で目標物から離れている事を伝える</p>
<p>3:07 ～</p>		<p>階段下に目標物が無い事を再確認、確信して、再び階段を上り始める 同時に歌声が大きくなった事を認識して、足取りが速くなる</p>	<p>探索児が階段を上り始めると同時に大きな歌声になる 歌声で伝えようとする意志と探索児の確信が交わる</p>
<p>3:14 ～</p>		<p>階段上の収納箱を発見し、フタを開ける 目標物を発見</p>	<p>大きな歌声をキープ 発見と同時に大きな拍手で、探索児と共に喜びを分かち合う</p>